
異能と異常は紙一重？

あらい三水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異能と異常は紙一重？

【Nコード】

N6040Z

【作者名】

あらい三水

【あらすじ】

他人の本音が聞こえる。ある日その力に目覚めた渡良瀬岬は、同じく異能者が集まる彩星学園へと転学する。そこに待ち受けていたのは大小さまざまな特殊能力と、大小さまざまな異常性癖を持つ奇人変人たち。そんな中岬は自らの力を上手に駆使しハーレムを形成したりしなかったり。基本コメディですが、ところどころシリアス展開があります。

第一話

「渡良瀬岬！わたらせみさき ここまでよ、観念しなさい！」

『絶対今日という今日は逃がさない！』

高校生にもなつてホウキを勇者の剣よろしく振りかざし大声を上げながら獲物を追い回す女子も珍しい。

教室を抜け出そうとしたところを目ざとく発見され、放課後の廊下を駆けずり回ること数分。

校舎の三階、屋上へと続く階段脇のよくわからないスペースによくわからないまま追い詰められた俺は、ぜえぜえと荒い息を吐く赤い顔に視界をふさがれた。

あたりに人気はない。

「フルネームで呼ぶと誤解されるからやめたほうがいいぞ」

「何をどう誤解すんのよ！」

「あいつらデキてんじゃねえのかみたいな」

「どつとつたらそうなのよ……、バカじゃないの!?!」

「芦名由岐！あしなゆき 俺と付き合ってくれ！」

「な……え、ええっ!?! っ、いきなりそんな……」

「みたいな感じだね」

ホウキでケツをシバかれる。きっと今しかできない貴重な経験。

これもやがて青春のページとして古きよき思い出になるのだろう。

……うわ、イテっ！ 痛い！ テイクバック大きすぎ！ つーかマジ痛いつて！

「ご自慢のポニーテイルを振り乱し振り回し、ホウキをフルスイング。バシ、バシ、と容赦なく叩きつける。

まったくこの暴れ馬め。しつげが、いや調教がなつてない。こん

なんじゃ誰も乗りこなしてくれないな。

「そうやってまた人のことバカにして！ あんまりふざけるんじゃないわよ!？」

『ちよつとドキつとしたけど……』

「それで返事は？ 答えははいかイエスで」

「はいはい、うるさいうるさい！」

『何なのコイツ……、まさか本気？』

「やっべ、二回もオツケーされてしまった。これはかつてない大勝利」

「うるさいって言ったのが聞こえなかったの？」

『なわけない。毎っ回こんな調子だし』

今日の俺は絶好調だ。あれだけ追いかけて走り回ったのに息一つ切らしていない。

それに……、さつきからめちやくちや聞こえる。

心の声が。

いつもより五割ぐらい増し。当社比。

こりゃちよつとまずいかな。

クラス委員長がまじめで勉強ができてやさしく温厚で黒髪ロングでメガネをかけていて巨乳なんていうのは幻想だ。

一つもこの条件に引つかからない人間が委員長になってしまふということも多々ある。

それはまだクラスメイトの人となりがよくわからないうちに強要される委員長選抜投票に一因があると俺は踏んでいる。

数少ない判断材料である自己紹介。それに成功したものの。失敗したものの。失笑を買ったものの。入学初日から死にたくなったものの。

さらにいうなら女子の男子化、男子の女子化。

今の若者が無意識下に求めているのは刺激。強烈なエネルギー！。

遅しいリーダーシップ。

強気な女の子に支配され、なじられ、踏みつけられたいという願望。

つまり芦名に投票した男子は全員DMだったという結論に達する。言うておくが俺は投票には参加していないからな。いわば不戦敗だ。DMである事を否定するわけじゃないけど。

でもまあいい。それはいい。今さら芦名がクラス委員長であることを否定する気はないさ。

それによく考えたらウチのクラスには俺を含め男子は三人しかない。

だけどクラスの平和をつかさどるはずのその人が、いたいけな男子に向かいこうして実力行使に出るのはいかなものかと。

「だいたいひどいじゃないか。さんざん追い回してこの仕打ち。俺がいったい何をしたというんだ」

「掃除当番！」

「は大変だよね！」

「あんたが！ 今週！」

「そんな、今日は水曜のはずだぞ。昨日もおととも掃除をした記憶がない。これはいったい……？」

「それはあんたがバツクれてるからでしょうが！」

「そうか、掃除当番だったのか……。それで……。」

「まいったな、みんなに迷惑をかけてしまったかもしれない。決まりも守れないロクでもないやつと思われたかもしれない。」

「まあ知ってたけど。」

芦名が本来の用途と違う使い方をしたホウキをぐいっと押し付けてくる。

俺は受け取つたら負けだといわんばかりに、

「……俺、掃除すごく苦手なんだ。ホント、これだけは」

「なに深刻そうな顔してんのよ！ 単純に掃除したくないだけでしょ！」

『気味悪いぐらいにコロコロ態度が変わるわねコイツ……』

「あれは忘れもしない中学時代。熱を出して学校を休んだ次の日、登校すると俺のイスは机の上に逆さまに乗せられてたんだ。掃除の時に上げたままだったんだ。シヨックだった。いくら一番後ろの席だったとはいえ……。それ以来俺は掃除が大嫌いになった」

「くつだらしない！ 全然関係ないじゃないの！ あたしなんかね、小学生の時給食残しちゃダメって言われて、どうしても食べられないうものがあつて掃除の時間になるまで食べさせられた事あるんだから！ もうずっと半泣きだったわ！」

「うわ、ださっ」

「なによ、なんか文句ある！？」

『本っ当につらかったんだから！』

「いや、文句なんてない。むしろ好感度アップだ。案外かわいいところあるじゃん」

「えっ？」

『か、かわいい？ ただの恥ずかしい話なのに……？』

「かわいさアピールのための嘘である事を除けば」

「嘘じゃないわよ！ なんでそんな嘘つかなきゃならないのよ！」

『元はといえばコイツがおかしな話するからあたしもつい……』

芦名はかみつくように声を荒げた。活発そうな瞳がどんな屁理屈もつっぱねてやると言わんばかりにらんらんと輝いている。

でもそんなに怒ってないな。なんとなくわかる。でもこのままだと……。

「とにかく、教室に戻りなさい！」

……来た。

この感じは……、ものすごく不快だ。体はすごく好調なのに、気分は最悪。

彼女の口から発せられた言葉が、矢のように脳に直接突き刺さる。彼女に従えと、脳が全身に電気信号を送る。

ただでさえ反発の強い俺の自衛本能は、全力でそれに逆らう。それに今日は輪をかけて暴走気味。

「ほら、一緒に来なさいよ！」

二度目のコマンド。

彼女の命令と俺の防衛意識がぶつかり合い、激しく衝突する。

普段ならとつくに押し切られているはずの俺の精神。やっぱり今日は勝手が違う。

二つの相反する力が俺の中で混ざり合う。

そして、ついに爆発した。

「……ねえ、どうしたの？ 渡良瀬？」

『なんか急に様子が変ね……？』

いつの間にかうなだれていた俺の顔を覗き込むように芦名が声をかけてくる。

「……キンキンうるせえな……」

「……え？」

「……今すぐ消えてくれ、俺の前から……」

「な、なによ急に……」

「いいから早く消えろ！」

芦名は消えると言われてすぐその通りにするような人間ではない。かといって豹変した俺の態度に動揺を隠せない様子。

その時俺の全身を支配する防衛本能が、衝動的に腕を伸ばし彼女の胸倉を掴んだ。

ブラウスのボタンが一つ二つ弾け飛び、乱暴な手はギリギリと首元を締め上げる。

「うっ、ち、ちょ、……く、苦しい」

『何！？ 何なのいきなり……？』

彼女のつまさきが床をこする。

胸元を掴んだ右腕は、造作もなく女子生徒一人を宙に持ち上げた。ブラウスがずれて彼女のへそのあたりまでを外気にさらす。

「や、めて……離し……て」

『どうして？ なんで？ こんな……』

どうして？ わからない、俺だつて聞きたい。

なんで？ 何故だろう。苦しいから？ 俺だつて苦しい。

ドクつと心臓が大きく跳ねる。一度は侵入に成功した「力」は俺の過剰防衛によって跡形もなく消滅した。

……なんだよ、楽勝じゃん。

その瞬間俺は、投げ出すように芦名を解放した。

彼女はどさつと廊下に倒れこみ、咳き込みながら荒い呼吸を繰り返す。やや胸元がはだけて乱れた着衣は、まるで暴漢にでも襲われたような格好。

芦名はおびえた瞳で俺を見上げている。いつものつり上がった目つきではなく、それはまるで俺の劣情をあおるような。

……なかなかいい表情するじゃねえか。俺好みの上玉だ。
そんな彼女に俺は冷めた視線を送りながら、ニヤリと口元をゆがめてこう口にした。

「安心しろ。襲ったりはしねえよ。……まだ今はな」

そう言い捨てると俺は彼女を置いて逃げるように走り出した。
体は、綿のように軽い。だが地を蹴る足は、力強い。
人のいない廊下を一瞬で走りぬけ、階段を一足飛びに飛び降りる。
人の気配を察知すると、俺は一気にペースを戻し放課後を迎えて
帰宅する生徒の群れに紛れた。

そうか、首を絞めれば声は出せないのか。クク……、あの女も
そのうちいただくとするか。あせることはない、奴が仲間だと思っ
ている女どもはすでに俺の手中にある。

まだ少し朦朧とする意識の中、漏れそうになる笑みをかみ殺しな
がら俺はこんな事を思った。

みたいな夢を見た。

第二話

「ほら、次はぞうきんで床！」

そのころ現実の俺は、芦名の下僕として彼女の命ずるがまま教室の清掃に励んでいた。

芦名は腕組みをしたまま俺の一挙一動を監視し、姑のようにいちいち不手際を指摘してくる。

ていつかげしげし蹴ってくるよこの人。痛いよ、怖いよ。

「クク……、あの女もそのうちいただくとするか」

机に腰掛けた長髪の女子生徒が、そんな俺たちの様子を見て薄笑いを浮かべながらつぶやく。

「いやだからそれはホント違うって！」

「あら？ 私としてはなるべく本人の意志を尊重しておまえの潜在意識に呼びかけてあげただけれど？」

さっきのは夢というか、正確には幻覚だ。非常にたちの悪い。

なぜそんな幻覚を見たのかというと、もちろん「ダメ、ゼツタイ」と言われる類のものをやってるわけじゃなくて、原因はこのヒトにある。

「ねえ渡良瀬。あなたの手中にある女どもの中に私って入ってるのかしら？」

「いえ、滅相もございません」

「知らなかったわ、私の知らない間に他の子たちとそこまで進んで

たなんて」

「いえ、全くの事実無根であります」

何でもお見通しよ、と立花鏡花は自信満々の目。彼女を一言で表すなら妖艶、という言葉が過剰ではないぐらいぴったりはまる。

妖しい。怪しい。とにかく何を考えているのかよくわからない。バカ、と言う意味ではなく異常にキれる、と言う意味で。この人と話しているとなんでも見透かされてるような気分になる。

それほど長い付き合いではないんだけど、すでに何度もすごく痛い目に合っているので逆らう、などとはもってのほかなのだ。

俺と彼女はクラスメイト同志ではあるが、年齢差に二つの開きがある。もちろん向こうが上。

やや大人びた顔立ちに大人びた所作。背丈は平均的だがなによりも美人だ。

これで巨乳でグラマーなら最高のお姉さんキャラとして殿堂入りするはずが、性格が偏っているせいか栄養が偏ったせいか肉付きは芦名以上の残念具合。

ちなみに本人はこれを密かに気にしていて、「冗談でもうっかり指摘すると世にも恐ろしい体験をすることになる。というか、した。

「つまらないわねえ……。張り合いがないわ。ほら、ここは一つ私を机に押し倒して本能のままに襲い掛かってみたらどう？」

「立花さん、またそんなこと言っつて、このバカが本気にしたらどうするんですか!？」

「そうだそうだ! そんな貧相な体に覆いかぶさったところで何が楽しいんだ!」

芦名の声にあわせてここぞとばかりにはやしたてる。

俺はただの外野。今のは芦名が鏡花さんを注意したのであって、

芦名があくまでメイン。

俺の掛け声は芦名の声にかき消されるはずだった。

……あれ、でもなんか視線を感じる。見られてる。いや、めっっちゃ睨まれてる。

「うふふふ……」

『やっぱりもう少し調教が必要よねえ』

あ、よかった。鏡花さん笑ってる。すげえ笑ってるわ。

見てあの口元。すごいここにこにこしてるじゃん。見てあの目。すごいキラキラしてるじゃん。

そんで見てよあれ、全身からものすごい殺気放ってるじゃん。

しかも「しょうがないわね〜」って世間話みたいなテンションで調教って聞こえた。

……やばい、危険だ、逃げよう！ ここは逃げるしかない！

そうして駆け出そうとした俺の行く手を、何者かが阻んだ。その異様な姿に俺は驚いて声を上げてしまう。

「お、お前なんて格好してんだ！？ いつの間に!？」

芦名だった。スクール水着姿の。

芦名はついさっきまで制服だったはずだが、いつの間にかそんなあられもない？ 姿に。

「暑いから着替えたのよ。あつくない？ 今日」

「暑いってお前……、だからってスクール水着はないだろ！」

と、言いつつ俺は芦名の全身をガン見していた。

「え……？ スクール水着、嫌い？」

「いやそんなことは……、むしろ大好きだけど」

「でしょ？ ふふっ」

『岬のためにこんな格好したんだからね……？』

そうか……。俺の知らない間にスクール水着はブラジャーやパンティなどの下着と肩を並べるほどメジャーな存在になっていたのか。しかし芦名のやつ、貧乳のくせにプロポーションはすごくいいな。とくにそのスラリとのびた白く輝く足は神々しさすら感じる。くそう、貧乳のくせに。

「じゃ、四つんばいになって。雑巾がけするときする時みたいな格好でいいから」

うおっ！？ こいつ、いきなりなんという命令を！

俺にあんな屈辱的なポーズをとれというのか？ せつかくの水着鑑賞タイムを放棄して！？

し、しかし、これは逆らえない！ こいつの「命令」に逆らうだけの力が今の俺にない！

ここはまことに不本意ながら……、言うとおりに……、クソおっ、体が勝手に……！

俺の意志とは正反対に体は嬉々としてその命令に従った。めっちゃくちや早かった。

「ふふ、いい子いい子」

由岐様はお褒めの言葉を発し、私めの背中にお座りになられた。

せ、背中に伝わる、水着越しに、お尻の、柔らかな感触。

その興奮に途切れ途切れになる俺の意識。

それを覚ますようにでん部をビシッとひっぱたかれる。

「ほら、出発！」

その一言で渡良瀬号は発車した。乗客は一名。のろのろと前進を始める。

しかしいつまでたっても加速しないため、乗客は不満の声をもらした。

「おっそいわねえ、ほら、もっと早く！」

べしべしと尻をはたく。だが速度は一向に上がらない。それどころかぐでつとその場につぶれてしまった。

「ダメね、これは緊急メンテが必要だわ」

芦名はおもむろに立ち上がると、その長い足でうつ伏せに横たわる俺の背中を踏みつけてきた。

こ、これはかつてない屈辱。自尊心とかプライドとかさういった類の言葉を今後一切口にできなくなりそうな……。

いかん、軽く興奮してる場合じゃない。一刻も早く体を起こし足をはねのけ男としての威厳を取り戻さねば。

そう気を入れてぐつと首をめぐらせ見上げた視線の先。

四肢からのびる美しい生足。そのはるか上から、愉悦の表情で見下ろしてくるスクール水着美少女。

奇跡のようなアングル。こいつはまるでエロゲーの一枚絵のような……。

がくん、と全身の力が抜けた。

もう、いいんだ。俺はこれで。悔いはない。

さらば平和な日常。俺がこれから進むのは変態という名の茨の道。

ククク……、ここまで墮ちてしまえば後はもう、何をしようが一緒だ。

もう隠すことなどない。ここから俺は真の力を最大限に発揮し、悪行の限りをつくすのだ！ ふはははは！

「その変態。最後に何か言う事は？」

デジカメを片手に、悪女が正座した俺に不敵な笑みを投げかける。

「ごめんなさい。本当に反省してます。ですんでどうか寛大な処置を……」

「前は教室の黒板だったから、今回は学校の掲示板にしましょうか」「それは本当にカンベンしてください！ いやまじで！」

この学校に転校してからまだ三ヶ月もたってない。

にもかかわらず早くもクラス内ではこうしていじめの標的にされ、この上全校生徒から後ろ指を指されるようなことになったらたまったもんじゃない。

「ま、いいわ。今日は気分がいいから特別に大目に見てあげる。……由岐、渡良瀬はスクール水着姿のあなたにいじめられるのがご所望らしいわよ」

そう告げられた芦名は、もちろんきちんと制服を着用している。ギョッとそれだけで人を殺せそうな視線を俺に送ってきた。全身

がわなわなと震えている。これは、爆発寸前だ。

「……………っ、この……………ド変態があ————っ!!」

今日、無事に帰れるかな、俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040z/>

異能と異常は紙一重？

2011年12月23日03時10分発行